

都市部における乳児養育〔3〕

中 田 幸 子

b 癇癖

c 12ヶ月児に対する罰

d 1歳児の罪

5. 習慣の形成と抑制

a 習慣の形成

b 習慣の抑制

(総目次は第2号参照)

b 癇癖

最初の誕生日までに、ほとんどの乳児は可成り移動することができるようになる。また、身近かな世界の探究もしはじめる。違ったものをいろいろつかみ、巧くあつかうこともする。物をつかみ、口へ入れたり、落してみたり、押しやったり、たたいたりする。食器棚や引出しを開け、中のものをみんな取り出してしまう。液体はこぼし、包みは開け、音の出るものは音の出るようにたたいてみる。こうして身近かな世界を知ろうとし、一つ一つについて特徴を知り始める。荒さ、なめらかさ、固たさ、もろさ、重さ、ねばさ、柔軟さその他についての数多くの経験は、すべて乳児の理解を高める上で欠くことができないものであるにもかかわらず、何の制限も与えず、自由に探究を許すような家庭はほとんどない。大部分の母親は、この年令の乳児に対しては、乳児自体が傷ついたりしないためと、貴重な財産をこわされたりしないための両点から、常に監督する必要があるという態度であった。つまり、母親の立場からは、乳児の移動に伴う一切の動きはいたずらとみられるわけである。しかし、12ヶ月児は、また社会的意識もある程度発達している。そこで、非常に興味があり、熱

中している活動を荒々しく中断されると、やがて邪魔をしにきた人を知り始め、可成りはっきりとしたやり方で、反抗を示すようになる。

母親に「痙攣を起こしたことがありますか」と尋ねたところ、70%はすでにそのような経験があると答えた。大部分の乳児はほんのときたまであったが、14%はしょっちゅう痙攣を起こし、1日に数回というの中にはあった。この間に続いて、どういうときに痙攣をおこすのか、また、母親はそのときどうするかを尋ねた。いろいろな状態が述べられたが、最も一般的であったのは、子どもが欲しがることがあり、どうしても自分でそれをとれない場合や、やっと手にしたものをすぐ取り上げられてしまった場合であった。その他では、他の子どもが乳児の持っているものを取った場合、他の子のおもちゃを欲しがっているのにもらえなかった場合や、時には、兄弟によってわざとからかわれる場合などが述べられた。多くの母親は、乳児は自分が思うようにできないとみるといつでも痙攣を起すというように一般的な表現で答えた。例としては、きれいな食物を食べさせようとするときや、好きな食べ物が十分でないとき、注意を十分していないとき、ベットや乳母車に1人でおいておくとき、および「ノー」といったときなどが挙げられた。

場合によっては、子どもにすることが許されているのに、それが自分でできないことから痙攣を起すことが原因となっていた。例えば、箱に蓋をすることができなかったり、障害物のために身動きが自由にできない場合などである。しかし、多くの場合、明らかなことは、子どもはある特定の人と衝突関係にあることを知っているということである。そして、大部分の母親は、その状態を戦闘の場とみていた。

痙攣を起こしている子に対して母親たちがどう扱うかという点に対しては、三つのちがった行為がとられていた。第1は、できるだけ気をまぎらすことを中心に努力するか、だきあげる人たちで、痙攣をおこしたことがあると答えた母親の33%はこの方法をとっていた。

36%は、痙攣をしずめる努力は何もしないで全く無視するやり方であった。

残りの31%は、癇癇をおこしたことで子どもを叱る態度にでていた。叱るといっても肉体的に強いものではないが、主なねらいは、してはいけないことを止めさせたのであるということと、それに対す反抗の態度がよくないのだということの両方に対する母親としてのはっきりとした態度を示す点にあるようであった。

要約すると、約半分の母親は子どもが癇癇をおこしたことがないか、あっても、可愛がることによって、早く癇癇をしずめる努力をしていた。他の半分は、癇癇は訓練して直さなければいけないものと考えている者と、全く無視することによって癇癇を起しても何もならないことを知らせようとしたり、叱る者であった。そして、後の二方法は、よく考えられたやり方で、子どもの道徳的訓練に欠かせない必要なものであるとして、母親たちは、自分たちのやり方を正当化していた。

c 12ヶ月児に対する罰

1歳児に対して、その行ないに対する応報か、将来に対する制止の意味で与えられる罰は、大方平手でたたく形をとっている。「いたずらをしたときには、どうやって罰しますか」という形で、罰の与え方の他の方法、たとえば、お菓子などを与えないとか、「もうこれからは可愛がってあげませんよ」などと言うなど、学令前の児童に対しては一般的に用いられる方法であるので、罰の与え方を平手でたたく場合に限定しないで尋ねることにした。しかし、1歳児の理解力の限界から、理論的にも実際にも、撰択の余地を残した質問は意味がなかった。たった一例の例外は、1人の母親が、罰のために全く子どもを無視する態度に出ていたことであった。無視するというやり方は、癇癇を起している子の扱い方に可成りあった。そして子どもにとってはたしかに罰を与える効果があることは疑う余地がない。しかし、ここでは、罰を与えることによってなされるもっと積極的な試みを論議しようとしているのである。また、癇癇に対して、無視の態度にでていた母親たちは、認めることができないような要求は達成されないものであるということを知らしめるところに重点がおかれていた。

そして、そのことが癇癖の直接原因であった。しかし、前記の1人の例外の母親は態度にちがいはあることは明らかである。

母親たちが、子どものいたずらの場に接したときの行為を考えると、多くの母親は、怒りの表現や、少なくとも認められないことやいましめを声色で表わしていた。何が実際に罰することをさせないのか、また、罰しないときにはどうなるのかなどについては何も告げられていない。

全般的にみて、体罰の形をとらない罰は、1歳児に対しては、少なくともこのグループの母親の意識の上では存在していなかった。そして、その後の議論において、罰というのは単純に平手でたたくことを意味していると解された。

予期し得る通り、母親たちは、子どもを罰することに対する母親たちの感情を、はっきりと道徳的な訓練と関係づけていた。先に述べた「いたずら (naughty) をしたときはどうやって罰しますかと」という問は挑発的な意味でした質問であった。実際に、どんな罰が与えられているか、母親たちが、どうすることが1歳児に対して適当な罰であると考えているかを知る上でも、また、平手でたたくことがしばしば述べられた上に、その行為を全面的に正当化する態度であることを知り得た点からも、この質問の仕方は極めて成功であった。

この質問に対してここでできる第一の区別は、問の表面的な意味を受け入れて、乳児に対する罰について特に抵抗を示さないで話し合いに応じた親たちと、この年令の児童に対しては罰という考え方を全面的に否定し、強く反対する親たちとの区別である。62%の母親は、罰を与えるという考え方を受け入れ、実際に自分の子たちに実行していた。残る38%は、この年令児に対する罰という
(39)
考え方に明らかに反対し、質問の仕方が適当でないと抗議した。

1歳児に対して罰を与えるという考え方と受け入れた母親たちも、可成りのいたみを覚える程の罰を与えるという意味では必しもない。罰と一般に呼ばれているものの多くは、実際には、母親の不快が高じたものである。軽くたたくことによって、母親は会話のレベルではないが子どもと意思の伝達をすることをのぞみ、そして、母親が許さないことをしているのだということに対して、

子どもの注意をひこうとしている。このようなやり方を、中には子どもがゲームと考えていると報じた母親もあった。また、多くの母親は、そのようなやり方では止めさせるのにはあまり効果がないことを知っていた。罰を与えることは、全体を通してみると、一般的には、長い間の繰返しによる何等かの効果を期待しながら、ごく小さい段階から、子どもの行為を道徳的に評価する試みとして正しいものとされているようであった。結局、このような態度は、子どもはやがて「正しいことと正しくないことの区別」を学ばなければならない。そこで道徳的な訓練は早くから始めた方が安全であるというように要約することができる。

少数の親たちは、この年令の子どもに対しても、厳格に叱っておかなければならないと考えていた。これらの人たちにとっては、罰は単なるゲームではなく、肉体的な可成りの痛みを伴う程度のもので、効果をのぞんでいた、

中には、母親自身が感情的になってしまって、必要以上にたたくこともあると述べた。例えば、子どもが失敗をしたときや、執ように探究を続けるような場合には、大部分の母親は爆発しないように努めてはみるが、感情的になってしまう。多くの場合、このような状態になるのは、午前中さんざん小さいいたずらを繰返しておいたあげく、高価な花瓶をこわしたり、洗たく物を泥に落したり、新しい壁紙をはがしてしまったり、食物を全部母親の服の上にこぼしてしまったりしたときである。このような状態は、母親が感情的になり、可成りきつく子どもをたたいたとしても、同情するに値する。しかし、このようなことを述べた母親は、罰をこんな場合に与えても、ほとんど効果はないと考えて、きつく叱ったことを反省しており、子どもをたたいてもかまわないと思われるときは、そうすることが効果をもたらすと考えられるときに限られるとする人たちがであった。

また、この年令の子どもとでも、意思の上で感情的になることがあるといった母親たちがあった。それは、してはいけないということを何回となく注意したにも拘らず、全く注意を無視されたような場合に起っていた。更に同じ状態

が続くと、母親は、子どもの執ようさはわざとする反抗からくるものと解しはじめ、ますます感情的になっていく。いたずら（mischief）と、故意にする反抗とは別なものであると母親は感じている。このような態度を続けている限り、たとえ赤ん坊であっても、罰を与えることは正しい。ある父親は、これを、誰が主人であるかを知るべきであるというように表現した。すくなくとも、われわれの文化においては、早かれおそかれ、全ての親が、その子たちとすでに述べたような対立の悪循環に入るといって間違いない。考えた上での反抗、気ままにすること、いわれたことを無視することなどは、親たちのありのままの姿からくる自尊心の根源のように思われる。また、一方では、このように小さい子の行為はいつもこんな具合に解釈されるわけではないので、この種の行為に対する罰の意味を解するのはどの位の子からかというのが問題である。ほとんどの母親は、12ヶ月という段階は完全に理解するには少さすぎると考えている。従って、叱ることは、母親の感情のはけ口としての意味はあるが、子どもにはあまり助けにならないと信じている。しかし、少数の母親は、小さい子でも、原罪と等しい、または同一視することができる、自分の目的を達しようとする狡猾さを有すると信じているようで、何らかの罰を与えることは、どんな小さい子に対しても正当化しうるものと考えていた。

ここで特に記しておく必要があるのは、少数の子どもは、母子の対立関係に母親が同じ立場で参加していることに評価する態度を示し、体罰から自分を守ろうとしたことである。

われわれは、子どもたちは、母親が認めないことに対して、実にいろいろな形で反応を示すことを知った。ある子たちは、母親の示す渋い顔を見るだけで、十分悪かったように感じて苦悩し、たたく必要は全然なかった。他は、あらゆる母親の注意を無視し、遂に母親を感情的にして、予期以上にきびしく叱られていた。どちらの場合も、母親たちは、後で少し悪かったと感じていた。何がこの二つの全くちがったタイプの行為を子どもにさせるのかは分らない。ほとんどいつでもやさしく、親切な母親が、急にこわい態度を示すと、子どもが状

況を察して、うろたえ驚れるのではないだろうか。その場合、すでに痛い目に合わされた経験があることは必要でないようであるし、一度もたたかれた経験のない子たちにもききめがあるようである。

これらの子とちがって、明らかに悪いと知りながら母親のとがめることをやり、度々叱られている子の場合、うろたえるどころか、困惑を示す間もなく、実際的に行為を取消しにかかる。

普段、家庭の中で他の兄弟がよく叱られていたり、たたかれているのを見ている子や、しょっちゅうおこり声ばかり出している親であると、おこることも、たたくことも子どもに対してはあまり意味がないものになっている。そして、こんな状態の下で育った子が、親の注意を無視するようになり、その結果は「反抗的」と考えられる。しかし、この場合の説明に役立つとみられる強情さと故意について、個人的基本的差異の可能性を完全に規則づけてみることはむづかしいので、ここではこれ以上立ち入らないでおく。

d 1 歳児の罪

罰という語を用いながら返答をした母親たちに対して、どんな種類のいたずら (naughtiness) を悪いと考えているかをたずねた。中には「いたずら (mischief) をすること」とか、「執ように言うことをきかない」などと、ごく一般的なことを答えた者もあったが、もっと具体的な行為を述べた者も多くあった。これらについては、違う項で記せる程に分析することができた。すでに癇癖について論じたが、子どもの癇癖は、罰を必要と感じさせる最大の原因となっていた。声高に泣くこと、荒々しく蹴ること、その他おこって発作的にする子どもの行為、たとえば、身体をこわばらせる、息をとめる、頭を打ちつけるなどは、母親たちは罰に価する行為としていた。また、罰は、母親を噛んだり、つねったりしたときや、母親の髪を引っぱったり、顔をたたいたりしたときにも可成り与えられていた。怒りや反抗の表れとして一般的に述べられた行為は、たたいて叱るべき行為として述べられた罪の四分の一以上になってい

る。

次に多く罰せられるべきいたずらとされた範疇には (17%), 破壊的行為が入った。食卓から物を引っぱる, 引出や棚を空にする, 壁紙をやぶく, 物を投げる, こわれやすいものや高価なものに触れたり, たたいたりするなどの行為である。ガラス戸つきの食器棚や, テレビのセットなど, どの家庭でも最も注意を要するものとなっている。しかし, 最も重要な地理的な地域で, 子どもの行為が罰せられるのは, 多分, 暖炉や火を使用する所であろう。大部分の家で, 1歳児に磁石的な影響を与えているのは暖炉のようである。火がたかれ, 炉格子がなされてなかったり, 炉格子が安全でなかったりするときには特に危険であるが, 火がたかれていなくても, 石炭をたべたり, 汚したりする。16%の罰に価する罪は暖炉やその設備に関するものであった。

その他の問題は, いろいろな家庭機具, 特に電気機具の探検から起っていた。スイッチ, 差込み, 三股など多く述べられたが, 1歳児が特に興味を示すのはラジオやテレビのダイヤルなどのつまみのようであった。テレビのつまみをいたずらするというのだけで, この範疇に属するいたずらの半分になっていた。最近のテレビ受像機では, つまみが上側につけられ, これらの子の視野にないのが幸いであるが, 調査時にはそんなデザインのものではなかった。台所では調理台が危険な所で, ここで罰せられることになる。しかし, ある母親は, 子どもたちが, いろいろと新しい試みを重ねて学ぶことと, 危険があるといって叱ることとは矛盾すると言っていた。約13%の罪は, 家具や電気の差込みに関するものであった。

約7%のいたずらは, 食事時の作法に関するものであった。ほとんど例外なく, 食物を投げることは叱られていた。口からはき出したり, 高い椅子に立って叱られている子もあった。また, 一般的に子どもは食事時におとなしくしていることができないため, 癇癖がおきる結果ともなっていた。

最後に, たたいて叱られる7%は, 生殖器をいじって遊び叱られている。そして, 少数の母親は, 排便のしつけに罰を利用していた。この点については,

次の章でもっと詳しく論じる。

一歳児が課せられる行為には二種類あるようである。その一つは、子どものしたことが、単純に母親を不快にしたときであるが、より多くの罰は、危険な状態から子どもを守り、危険性を教えようとして与えられていた。少数の母親は、この年令の子どもの一般的ないたずらにたたいて叱ることを信せず、子どもに危険があると思われるときにだけ、危険を教える意味で罰すると考えていた。11%は、叱るときにたたかず、危険なときにだけたたいて叱っていた。

一般的に寛大な母親と、きびしい母親の概念を得るために、個々の母親について、叱ることと、泣かせっぱなしにしておくことに対する母親の気持の違いを比べてみることにした。この目的のため、危険のあるときだけたたいて叱る場合を除き、普通のいたずらでたたいて叱っている事例と、最高17分から2時間の間、泣いていても関心を示さないでいた事例を集めた。24%の母親は、可成りきびしく、両者を共に行なっていた。更に詳しくみると、44%の「たたく」⁽⁴⁰⁾母親は、17分以上泣かせっぱなしにしていた。一方、たたいて叱らない母親は34%しか泣かせっぱなしにしていなかった。この差は統計的に意義がある。⁽⁴¹⁾

この章でみてきた、泣くことに対する母親の反応、癇癖の扱い方、たたいて叱る場合などは、道徳的な評価や、人格形成のためのしつけが、極めて早くから行なわれていることを示している。もちろん、この年令児のことであるから、親の側の道徳的な態度が「良い」行為を保障する効果はない。しかし、同時に子どもたちは、自分に課せられた圧力を全部忘れてしまうわけではない。僅か1歳ではあっても、完全にはっきりと反抗や非協力を示すことができる。深く傷つけられたと子どもが感じたときなどには攻撃的になったりして、子どもは知的には総合性に限度があるかもしれないが、母親の機嫌が変わったことに対しては、すでに可成り情緒的には反応でるようになっている。母親の立場からは、子どものしつこい反抗によって、怒りの感情を強められる。そこには二つの相互作用がある。つまり、母親と子どもとの間になされる感情面での作用と反作用である。しかし、このような状態に対する解釈には個人差が可成りある。

極端な場合は、「厳格」な母親は、もし、子どもの性格が気に入った型にはめられるものであるとしたら、必ず何らかの不幸をもたらすであろうと論じた。子どもはきびしさをゆるめると、次々に要求してくるから、絶対服従の地位におくべきである。従って、「警告」は少ない苦痛を与える形としてきびしく与えるべきで、そうすることが「分らせる」ための最上の方法であると考えられていた。こういう母親の中には、こうするとは、子どもよりも母親自身を傷つけるものであるが、なおかつ最終的には子のためになるとする古い格言を強く信じている人たちがいた。これに対し、「許容的」な母親は、大体自分に忍耐力のなかったことを反省していた。子どもは何が「いたずら」になるのかを知るには小さすぎるので、子どもは攻めるべきではないし、罰の意味も理解できず、当惑させることになるだけだからである。こうして、許容的な母親は、「状態に関係なく子どもを愛する」。なぜならば、たたいて叱ることの意味を知るのには小さすぎるからである。厳格な母親は、たたいて叱る以外に知らせる方法がないと考えてたたく。両極端の母親とも、原則的な立場から、自分の行為を正当化する傾向にある。ここで記しておかなければならないのは、極めて少数の母親だけが、育児に体罰を使用することに反対したということである。しかし、これは子どもの年令からだけする反対のようであった。中間的な立場にある母親は、どちらの態度が一歳児に対して正しいのか分らない人たちや、理論的にはきびしいが、実際にはやさしい人たちのようであった。従って、これらの人たちは、しつけの問題の扱い方が不統一のようであった。

5 習慣の形成と抑制

a 習慣の形成

多く人びと、特に心理分析的な立場で確信をもつ人びとによると、排便のしつけは、子どもにとって最も重要で基本的な経験の一つであり、子どもの性格や将来の人格形成に決定的な影響を与えている。大人が「適当」と考える場所——それは直接食事や生活に使用する場所から離れた所であるが——に

いて排泄ができるようになるには世界的には最初の5年位の間とされている。
 Madagascar の Talana 児 ように、6ヶ月からぬらしてたたかれる場合に
 しても、南米の Siriono のように徐々にやさしくする場合でも、完全に排便
 ができるようになるのに6歳以前は期待されていない。⁽⁴³⁾ すべての子どもは、早
 かれおそかれ、また欲すると否とにかかわらず括約筋統制の語であらわされる
 状態におかれる。大部分の子どもは、母親によってこのしつけがはじめられる。
 われわれが信じると否とにかかわらず、その性格は、このしつけが行なわれる
 環境によって大きく影響される。われわれの文化においては、少なくとも排便
 のしつけは、母親と子どもの間の情緒的な相互作用の重要な焦点となっている。
 母子双方にとって、強い不安と緊張となってあらわれることが多い。母親自身
 の深い感情と抑制がこの状態からすぐに生じてくるように思われる。特に、無
 防備な身体に対する恥らいの態度と関連して、排出物に腹を立てる。これに対
 して子どもは、恐怖感をつのらせて母親の緊張に反応するか、排便行為そのも
 のや、便器或は便所をきらうようになるか、或は、排便をすることや失敗する
 ことが、母親に賞められたり、母親を失望させたり、少なくとも母親の注意を
 引くことのできる有能な武器であることを知るようになる。子どもの反応がど
 の形をとっても母親にとってみると頑固な協力拒否と解され、母親はますます
 感情的になり、他の全家族も母親に影響されて同じようになる。

最も表面的な観察によっても、われわれの文化においては、排便のしつけを
 早い時間に完了させることが望ましいとする点を可成り強張していることが述
 べられている。より高度の生活水準にあることがこの傾向を生んでいることは
 疑ない。なぜならば、拭くことのできる床の表面や、プラスチックのパンク
 ができ、広く用いられている汚れやすいじゅうたんは、商業的に持ちこまれた
 人間の基本的な臭いに対する対策として家庭に侵透しはじめた。また、世界的
 傾向であるレジャーに対する期待もある。しかし、使用後捨てるおむつや貸お
 むつ（簡単には得られない）を利用することのできる母親は極く少数である。
 そして、雑用を減らしてきた繁栄、とくに近代的な洗濯機でさえ、できるだけ

早くおむつをはずしたいと思う母親たちの気持を取り去ってはしまっていない。やたらにおむつを汚す子どもは、社会的な負目にある。不便な状態を作り出す者として、母親や、その友人や、或は少ししか理解していない親族との間に。こうして、早く排便のしつけをすることができた母親は、そのことに当然誇りをもつが、同年令の他の子が、すでにしつけられているのに、まだしつけられていない子の母親は、それを恥と考える。

育児書の中には、早期にする排便のしつけが望ましいか、可能であるか、可能であるとすれば、どうやって完成するかについて反対の意向を示しているが、母親自身が早期の訓練に高い価値を認める傾向がある。一般的には、アドバイスは、育児書の書かれた時期の差によってかなり違っている。最近の書物は、早期の訓練をすすめるもの、1歳以前に完全にしつけることは望み薄として、便器の使用をおそめにする傾向がある。こうして、権威者の中には、単に習慣づける意味で、日課として出生の直後から行ないはじめるように勧めている者もある。この場合も、排便のしつけがこうすることによって早期に完了するという意味ではなく、便器にお尻が触れることによって反射的に排便するにすぎないことを認めながらの勧めである。早くから便器を使用する理由は、母親は排便の時期についてこの方法を取るによって知ることができるし、後になってまた失敗することがあっても、少なくともおむつの洗濯枚数を減らすことになる。更に、早くから便器の使用に慣れさせておけば、後になって便器に慣れさす必要がなく、自発的に排便するようになるときに自然に行なえるようになるなどである。反対の意向は、早くに訓練をはじめても成功するのは極く稀であるので、結局何度も失敗をくり返すことになる。そうしているうちに母親が悲観し、感情的になってくるので、子どもは不当な圧力の下におかれる。このような状態では、子どもは反抗的になりやすいので、一たん排便のしつけでこじれた子をあやしてよい習慣をつけることは、更にむづかしいとする。これらの理由から、排便のしつけは、生理現象を自分で知るだけではなく、そのことを言葉で表現できるようになる1歳の前半期まで始めるべきではないとし

ている。これら二つの見解は実践上の教えとしては全く対立するように見えるが、母親たちが排便のしつけでとるべき一般的態度に関しては可成りの共通点があるように思われる。つまり、強い圧力を子どもの上に常にかけてはならないということで、失敗を罰するなどは問題外だということである。そして、また常に強調されることは、1歳の終りまでに確実に排便のしつけができてしまう子は少しかないということである。そこで、あまり仰々しくしないでいれば、すべての正常な子どもは、それぞれの子どもに応じた適当な時期がくれば失敗しなくなることを母親たちは知るべきである。

さて、以上の点を考慮にいれながら、実際には母親たちはどうしているであろうか。われわれは、一般的にはあまりに早くからのしつけに期待することは無意味であるとは知りながら、早期の成功した排便のしつけに対する名状しがたい名声によって影響されているという印象を受けた。このため、大層多くの母親たちは、口では、1歳児にしつけを期待するのはむづかしいと言いながら、自分の子だけは違ってもしかするとうまくいくかもしれないと母親自身でギャンプルをしているような奇妙な現象となっていた。早くしつけを始めても失うものは大してない。早くに成功すれば、早くにしつけられた子どもや、子どもを扱かう上でむづかしい面を明らかに効果的に扱うことができたという両面に対して手柄を主張することができる。もし失敗しても、「すべての子どもはそれぞれに違っている」そして、早期に成功するかどうかは大半は運によるという専門的に権威づけられた考え方に立ちもどることができる。

この母親たちの希望をもった行動と、あまり楽観的ではない期待との矛盾は、次のような数字となって表れた。20%弱の母親は、18ヶ月以前に日中は失敗しないように期待していた。そして、40%のものは、2歳になるまでは、だめであろうと考えていた。子ども自身が自分で排尿をコントロールすることができるようになる時期についてはほとんどが同じ位の時期を考えていた。このように、むしろ悲観的で現実的な考えにもかかわらず、83%は12ヶ月以前にしつけを開始していた。この中には8ヶ月になる前に始めたもの63%も含んでいる。

20%強のものは、2ヶ月以前から定期的に便器にむかわせていた。この大部分は母親が産褥から離れると同時に始められたものである。わずかに17%のものが、面接時にまだしつけを始めていなかった。

1歳児の排便のしつけについても、可成り神経質になっている母親があることが明らかになった。H. V. に対しては29%がすでにしつけられたと答え、大学側に対しては比率はぐっと減り10%であった。そこで、この数字でさえ、好ましい方に誇張されているのではないかと疑うものである。ここで述べておかなければならないのは、Douglas と Blomfield の著作で述べられている⁽⁴⁴⁾47%の子どもは最初の誕生日以前に完全にしつけられるという推定と、この調査結果とが明らかに矛盾するという点である。ただ注意を要するのは、前記の調査は遡及調査で、児童が6歳のときになされたものであることである。特定の子どもが、いつから失敗しなくなったかを覚えていることは、家族が1人以上であればむづかしいが、この点を除いても、排便のしつけが完了するのは特定の日ではなく、大分失敗しなくなってからでも失敗することもあるなどの点から、調査の信頼度を高めるためには、調査対象となる事柄が起ってから一年以内に母親に尋ねるの でなければならない。

専門家はしばしば早期に排便のしつけを始めると、子どもは、1歳位になると便器を嫌うようになる、それは、子ども自身の行動を制限されることや、独立性の成長の表れからくるものであると、警告を与えていることをわれわれはすでに述べた。われわれは実際に多くこのような事例を見出した。そして最近の育児書は早期の訓練に反対している。失敗により逆もどりすることは母親に傷つきやすい期待や怒りをもたらすからで、この調査の解答者からもこのようなことが多く語られた。われわれの質問は「今、排便のしつけで困難を感じていますか？」という形で行なった。解答は「非常に感じている」「中位である」「感じていない」に分けられた。わずかに6%が「非常に感じている」に属していた。これらのケースは早くに訓練をはじめうまくいっていたにもかかわらず、その後何度も失望を母親が経験している場合が多かった。

b 習慣の抑制

排便のしつけを通して、母親は適当な時期と場所で排便をすることを教え、子どもが自然のいとなみを自分でコントロールするように訓練している。しかし、母親は単に排便のしつけばかりでなく、同時に文化社会で必要とする自己抑制の習慣づけを印象づけようとしている。例えば、われわれの社会の子どもは、排泄の行為は全く私的なものであることを学ばされ、人の前で口にするべきではないこと、生殖器は特に身体の私的な部分であること、ある行為や姿勢は失礼であることなどを知らされる。こうして、子どもは「良くないこと」に対するセンスを、特に積極的な実例を示されなくても持つようになることを期待される。直接の圧力は子どもにかけられないが、母親の声色やゼスチャーによってチェックされるわけである。

これらの全ては、可成りの時間を必要とする。特につつしむことの訓練は、極く直接的なやり方をする場合でさえも、1歳児に対してはあまり効果的には行なえない。しかし、この年令の子に対して、母親が示す態度は、母親の一般的な感情を年上の子たちに示す手段ともなっている。そこで、子どもが身体で遊ぶのをみたことがあるか、その場合にどうやって止めさせようとしたかについて尋ねた。主に知りたかったのはこの年令の子が性器で遊ぶのを禁じるべきだと考えているかどうかの点であった。しかし、直接の質問の代りに「身体でよく遊びますか、たとえば、顔をひっかいたり髪を引っぱったりしますか、耳を引っかきますか、まっげを引っぱりますか、性器で遊ぶことはありませんか、頭を打ちつけたりしますか」などの形で尋ねた。

このように直接質問を避けたにもかかわらず、この質問は母親を恥ずかしめ、怒ったような調子で否定するものもあった。特に H. V. に対しては性器で遊んでいるのを認めようとしたくないような印象を与えた。H. V. に対しては、19%だけがそのようなことをしていると答えたが、大学側では36%もあった。19%の H. V. に対する解答者の半分強は許容的であったが、大学側の36%は3分

の1弱がそうであった。このことは、実際にこの遊びを止めさせようとする母親たちは、先ずこの種の遊びを認めたがらないのだということを示すのではなからうか。

7%の母親はこの場合にたたいて叱っていた。大部分は手をはずしたり、気をまぎらわせたりしていた。少数は意識させてしまうことによって一層習慣化してしまうのを恐れて特に許さないことをしているということを示さないでいた。中には、子どもの自然な行為であると考えながら、無視することができずにいるもの、および直ちに禁じるべきと考えているものなどがあつた。最後に、全面的に許容的な態度の母親は、12ヶ月児であるからということで許容的なので、子どもが成長した後まで同じ態度ではないことを記しておかなければならない。

2つの事例以外は全部男の子の場合であつた。男子の方が注意を引きやすいためであろう。母親たちは、認めないかどうかは別として、小さい男の子の場合みのがしている場合が多いといってよいであろう。また、同じ行為を男の子がする場合と女の子がする場合とでは、母親が受ける刺戟が違ふこともあろう。

社会階層の差による態度の差も明らかになったが、この点は章を改めて検討する。

調査者の違いによる見解の差違は、全体に対しては少数しか対象にしていないため統計的な結論を得ることはできなかった。しかし、印象を受けた限りでは、文化の圧力から、はいはいの段階をすぎた子に対して手淫をみのがしている母親を極く少なくしているとみられた。

注 (39) 本文中で紹介されている解答者の表現によると、naughty という言葉を用いるのは1歳児に対しては適當でない。つまり、1歳児は naughey に相当するような行為を示さないという意味で反対するもの、罰を与えるには小さすぎるし、罰の意味するところを理解することができないから無意味であるという立場で反対するもの、自分が小さいときにありとあらゆる形のあるものでたたかれた記憶があるので、自分の子には絶対に手をふれまいと決心したためとするものなどがある。中でも前二者が一般的な態度のようである。

尚、いたずらを意味する語に mischief, mischievous があるが、この方は茶目気のあるいたずらを指し、この間で用いられている naughty は mischief とちがって非難されるべき行為という意味でわざとこの語を用い挑発的な質問となっている。

- (40) 短い方の時間を17分としたのは、大部分の母親が「15分ないし16分」と答えたからである。しかし、実際には、短い方は30分位になると思われる。
- (41) 前号4, 社会性の根源, 160ページ以下, 特にa「泣かせておく」参照。
- (42) (訳者注) 'give him an inch and he' ll take an ell' 二寸を与えれば尺を望むまたはひさしを貸しておも屋をとられるの意を「きびしさをゆるめると次々に要求してくる」とした。
- (43) J. M. M. Whiting and I. L. Child: Child Training and Personality (Yale University Press, 1953)
- (44) J. W. B. Douglas and Blomfield, Children under Five (Allen and Unwin, 1958)